

20250218 「よりよく考え、『わかる』『できる』を実感できる子の育成  
～学びが深まる問題解決型の授業づくりを通して～  
鈴木小の研究発表会に参加して（２）

鈴木小学校の研究の概要とその趣旨について話題にしてきましたが、実際の授業はどうだったのでしょうか。次は、授業を中心に話をすすめていきたいと思っています。

シンポジウムの中でも語らせていただきましたが、どの学級も「わかる」授業としてとてもよかったのではないかと思います。それは、問題場面に対して、どの授業でも「図」や「数直線」等を用いて、

「何が問題になっているのか」

「何を求めればいいのか」

を視覚的に捉えることを丁寧に行っていたことが大きな要因です。  
さらには、図をこども自身が解説している姿もとても印象的でした。

「問題のお話の順番に図に表してみよう」

「式のこの数は、図だとどこになるのだろう？」

「図のここを求めるのだから、～算ですね」

という発問もよく聞かれ、

「問題」⇔「図」⇔「式」

の関係をどの学級もとても丁寧に扱っている印象を受けました。  
これなら、こどもは分かる手応えをつかめるだろうと思いました。

さらに、適用問題に取り組むことで、その時間での理解をその時間内にこども自身が自己評価でき、同時に教師も把握することができ、次時以降の指導の対策を的確にたてられるようになります。

さて、驚くべきは、板書の完成度（？）の高さでした。どの学級も最終板書が実に整っている（？）のです。まるで最初からシナリオがあったとでもいうような印象すら受けます。これはどういうことか！そのからくりは、研究会後

の懇親会で分かりました。先生方は、事前の模擬授業を仲間どうして何度も何度も行っていたというのです。

「こう発問すると、こどもはこう反応するよね」

「こういう反応が出たら、こう切り返すかな」

「ここで、こんなボケをかますと、きつとこどもは『え〜っ！』ってなるんじゃない」

などの言葉が何度も模擬授業の中で繰り返されたと伺いました。

それは、失敗しないように指導の手順を確認する準備ではありません。どこまでもこどもを中心に置いて、

「課題の場面や数値の適正さの確認」

「あらゆる指導場面での教師の発問」

「児童の反応の予想」

「手が付かない子への対応」

「取り上げる解決方法の精選と順番の吟味」

「扱う数学的表現」

「着目させるポイント」

「まとめと適応問題とその扱い」

を模擬授業という実践的な手法を用いてぎりぎりまで検討するという準備です。

それは、あらゆる想定に対して、最後にはしっかり「わかる」「できる」にもっていくという執念とも言える授業づくりです。こうした、準備を何度も繰り返して、当日の授業を迎えたということでした。なるほどと、先生方の本気度に頭が下がりました。

この授業づくりの視点は、当然のことながら算数に限ったことでも、特別なことでもありません。あらゆる教科指導でのポイントといえるでしょう。そして、こうしたポイントを普段の授業作りでもしっかりとつことは、他の教師の授業を参観した時に学ぶ視点をもつことにもつながります。他の授業から学べる人とは、すでに学ぶ視点を自身にもち実践しようと努めている人ともいえるでしょう。鈴木小の先生方は、少なくともこの研究を通してそのあゆみを踏み出しているのだと強く感じました。